

変わらなくてもいい

若林 亨

自分がアナログ人間で良かったと思いますよ。超アナログでね。パソコン、タブレット、スマホは一応持っているんですがほとんど使ってません。スマホはメールを少々。タブレットはユーチューブを少々。でもすぐに飽きてしまいます。パソコンにいたってはネットにつながってないので文字を入力して保存してプリントアウトするだけのもの。ほとんどワープロです。なので周りには迷惑をかけてます。例えば作品。本来なら添付ファイルで簡単に済むところをわざわざ先方でプリントアウトしてもらって紙媒体で郵送してもらってるんです。余分なお金がかかってますね。

と、なぜこんなことから書き始めたかというところ、「文学学校は変わっていないなあ」、これが言いたいんです。

僕が文学学校に入学したのは1990年前後です。バブル景気真っ只中でした。夜間部に二年間在籍しました。専科一年研究科一年。クラスは十五人ぐらいだったかな。老若男女がそろってました、といたいところですが、若い男は僕一人でした。年輩の方が多かったですね。年輩といっても当時二十代半ばだった僕の中から見た年輩です。実際はみんな若

かった。文学学校へ来る人はみんな気持ち若いです。持ち上がりだったのでほぼ同じメンバーで二年間勉強しました。二年たってこれからどうしようかなと思っていたところ、ある同人誌の方から声がかかりましてその同人誌に入らせてもらいました。それからずっと文学学校へは来てなかったんです。同人誌の集まりで文校のことは耳にしましたが行く機会がなかった。

数年前に突然、チャーターはどうかと声をかけてもらい驚きました。まったく想像もしてなかったのでまさかのまさかです。恐る恐る引き受けまして、久しぶりに文学学校へ向かったというわけです。

谷町七―二―三〇五、谷町第一ビル三階。当然迷いました。土地勘がありませんから。地下鉄谷町線の谷町六丁目降りて地上へ上がってきたらもうパニック。右も左も前も後ろも分かりません。二十五年振りってこんなものなんですね。文学学校の場所って分かりにくいでしょう。迷う方も多いと思います。なんとかそのビルを見つけて三階に上がりま

す。いざ、二十五年振りの文学学校との対面です。

その第一印象が「変わってないなあ」です。教室も事務室もそのまま。二十五年前にタイムスリップしたみたいでした。特に事務室の中が変わってないのでびっくり。と同時に笑えてきました。実際はマイナーチェンジを繰り返してきたのかもしれないませんが、細部より全体の印象が勝りますでしょう。本だらけで雑多な感じがそのままだったので笑えてきたんです。

でもほっとしました。文学学校なんだから本がたくさんあって当然です。棚からはみ出ていても当然です。床に積み上げられていても当然です。ああこれいいんだなと思います。変わってなくてよかったです。

それでちょっと想像してみたんです。もし文学学校が最新のインテリジェンスビルの最上階に入っていたらどうなんだろうと。そのビルには時代の最先端をゆく企業がたくさん入っていて、スーパースタリマンたちが闊歩していて。最上階の床には赤じゅうたんが敷き詰められ、壁には有名絵画がずらり。各部屋はピカピカに磨かれていて塵ひとつなく、黄金色のソファアーに大理石のテーブル。天井にはシャンデリア。事務室の扉は当然自動。中へ入ると三方の棚にはまるで整理学の見本のように本が……。あれ、本が一冊もない！。そう事務室には本が一冊もなく整然とパソコンが並べられてあつて、学生たちは思い思いに読みたい本を検索して……。想像しながら、それはないだろうと突っ込みを入れました。それはいいですよ。

やっぱり変わらなくていいんですよ。無理して変わろうと

しても不細工になるだけです。棚から本がはみ出しているいいじゃないですか。その本が何かの拍子に落ちて床に散らばってもいいじゃないですか。

と、ここで再び冒頭のアナログの話に戻ります。

自分がアナログ人間で良かったと思いますよ。パソコンを前にしないと作品が書けないという人も多いと思いますが、僕はパソコンの前に座っても一行も書けません。頭の中が固まって何も浮かんできません。紙の余白が欲しいんです。なんでもいいから余白が欲しい。大学ノートがあれば最高ですがチラシの裏でもレシートの裏でもかまいません。この原稿も文学学校から送られてきた茶封筒の余白に書き始め、余白が埋まったので裏へ移り、それも埋まったのでちよつと困って、中に入っていた樹林のとあるページの余白に書き込んで、それも埋まったので次のページに移って……。

下書きが終わったらいったんパソコンに打ち込むのですが、入力が遅いのでここでひとしきりもたもたします。ちなみに僕はかな入力です。キーボードからひらがなが消えたらどうしましょう。数年後にはありえるかもしれません。推敲はもちろんプリントアウトした紙の上で行います。

変わりたくても変われないのかもしれない。文学自体に形なんかありませんが、文学学校には集い語らうという形があるように思います。

文学学校がこれからも変わらないことを願っています。